新潟教育研究所

令和元年12月10日発行　第 42 号

公益財団法人 新潟教育会
新 潟 教 育 研 究 所

〒951-8104　新潟市中央区西大畑町590-3　新潟教育会館　TEL・FAX 025－222－2971
URL http://kyouikukai.jp　E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

「経験値」の円滑な引き継ぎ

新潟教育会 代表理事
濱 中 力 也

6月25日，文部科学省は，「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」を公表した。そこでは「誰一人取り残すことのない，公正に個別最適化された学び」を目指すとし，ICTを基盤とした先端技術や教育ビッグデータの効果的な活用などが述べられている。ICT環境に関わる地域間格差等の課題もあるが，今後教育環境が一層変わっていくことが予想される。

この公表された資料の中に「ベテラン教師から若手教師への『経験値』の円滑な引き継ぎ」というキーワードが出てくる。学習履歴や，行動等の様々なビックデータの分析により「経験値」の可視化を実現するという。少し違和感を感じる。

「経験値」の円滑な引き継ぎの中心は，やはりOJTによる授業研究であろう。現在，県下の教職員の年齢構成は50歳代のベテランと20歳代の若手が多く，中堅層が少ない実態がある。A小学校の研究主任はこうした実態の中で，50歳代ベテランからは落ち着いた授業経営を，若手からは新しい教育理論や教育技術を引き出しながらの授業研究を構想している。この双方から引き出すという発想が授業研究への期待値を高めている。また，B中学校では，教科や学年の壁を取り払い，４つのチームを編成して年に２回の授業研究を行っている。研究主任が大切にしていることは「他者の反応に怯えたりすることなく，自然体の自分をさらけ出すことのできる雰囲気」→心理的安全性だという。どこかの研究会で聞いたような・・。確かに研究協議では，ファシリテーションによって様々な意見が可視化され，拍手と共に共有化されていた。このアウトプットの工夫が当事者意識や同僚性の醸成につながっているように感じられた。

いかにも形骸化した，ワクワク感のない授業研究は避けたいところである。やらされ感満載の雰囲気の中，授業に基づかない協議が拡散するようでは意味がない。授業研究は，授業の中で起こった事実をもとに，自分なりの解釈を交流させる好機としたい。できればその中で，一人一人の子どもたちの学習履歴や丁寧な見取りも交換したい。そうする中で，ベテランから若手への「経験値」の円滑な引き継ぎが行われると思う。よい授業への道筋は無限に存在している。その道筋に出会う機会をつくり，肌感覚で大切に伝えていきたい。

先日，初任者の授業を参観する機会を得た。小学校５年生の国語，宮沢賢治「注文の多い料理店」。授業者は，「作者はなぜ紙くずのようになった紳士の顔を元に戻さなかったか」と子どもたちに問いかける。授業の山場であり，子どもたちが根拠をもとに自分の考えを生き生きと述べる。教職の魅力や喜びを改めて感じる瞬間である。研究協議では，ベテランから温かい指導助言がなされた。

ところで，当法人の教育資料室もデータベース化を進めようとしている。当県教育を遡り，先達の貴重な経験値に触れることのできる宝庫である。また，教育アドバイザーも県民のニーズに正対できる人材である。是非，積極的な活用をお願いしたい。

伝えたい教師の心と技(41)

学ぶ力の育成と指導力向上で「笑顔あふれる学び」の実現を！

新潟教育研究所 教育アドバイザー
種 村 公 夫

1　はじめに

昨年度から８市町村で授業を見せていただいたり，学力向上を目指す「思考をアクティブにする授業づくり」のノウハウを講演会や研修会で伝えたりしている。全学級で日々の授業を質的に向上させることが目標である。「ほめて育てる指導」を基に，指導と評価を可視化し，子どもの育ちをデータ化して検証する取組を繰り返し，子どもも教師も笑顔になる姿をたくさん見ることができた。教員の大量退職と若手教員の急増で，教員の指導力向上は，喫緊の課題となっている。

そこで，お勧めしたい子どもを育てる指導のノウハウの一端を紹介する。学力向上に向けた授業づくりの一助にしていただければ幸いである。

2　思考をアクティブにする授業づくり

①「ほめて育てる指導」が基本

子どもを見ているとできないことが気になるが，実は，できるように育てているかが課題である。子どもの学びを育てるには，目標を明確に示し，「ほめて育てる指導」が有効な手立てである。

②「指導の可視化」の実現

口頭で全員に情報を届け，徹底することは難しい。それより書いて示すとよい。キーワードに写真を添付し，達成した時に評価も加えていくと指導と評価の一体化が可視化でき，効果的である。

③「よい姿勢・目線」と「聞く力」の育成

姿勢は，子どもの意欲と集中力を示す。特に大切なことは背骨の自立である。目線のつながりも加え，話し手に反応する聞き手に育てば学力向上の半分は達成できたと言ってもよい。

④「分かりやすい板書」の実現

学力を向上させる「分かりやすい板書10のポイント」を勧めている。特に課題（◎）が生まれる過程の可視化は重要である。原問題に対して多くの子が発言し，困り感がふき出し等でたくさん板書され，その困り感の接点が課題となる。それを板書で可視化することが授業づくりの要となる。

⑤「書く力」の育成

教師が板書するとすぐノートに写す子をよく見かける。それより自分の考えを図や式，言葉で記述することが大切である。写している子は考えず，聞いていないことが多い。聞くと書くは時間を分け，少なくとも自分の考え，ふり返りの２回は考えて書く機会を確保したい。短時間でたくさん書く子を育てると思考の前倒しも実現できる。

⑥「話す力」の育成

聞き手の目を見て言葉で伝える力を全ての子に身に付けさせたい。「話す」ことは思考力を育て，深い学びを生み出す。15秒，30秒などの目標を設定し，話すことにこだわらせると子どもの思考力は飛躍的に向上し，思考の前倒しも生まれる。また，いつも同じ子が話す授業ではなく，話す子が増えていく指導が学力向上には効果的である。

⑦　対話的な学びの育成

ペア・グループ学習が教師の指示で行われる授業をよく見る。学び方を教師が指示していると，子どもの目的意識や意欲は高まりにくい。それより困った時，自分の意志で自由に相談させると子どもはいきいきと話し始める。ノートに考えを書いたら子どもに友だちの書いたことを黙って見て回らせる。考える方法は，子どもに選択させ，結論を導かせる。これらの手立てで子どもの学びは，自然と対話的になる。　（紙面の都合で以下略）

3　おわりに

分かりたい，できるようになりたいと願う子どもと，エネルギーはあるがどうしたらよいか悩んでいる若手教員がいる。教育現場の大転換期を迎えた今，教員の指導力の基礎・基本を顕在化し，子どもの学びの基礎力を育て，「笑顔あふれる学び」の実現を支援できたらと願っている。

繋ぐ・支える・輝く
（支えるの巻）

新潟教育研究所 研究員
宮川由美子

はじめに

10月１日から消費税が８％から10％になった。我が家でもティッシュペーパーや洗剤を，ある程度買い溜めした。庶民のささやかなる抵抗である。キャッシュレスはお得だと，盛んにテレビから流れる。ついていけない老母も私も，「もう，どうとでもすれば」と開き直っている。

１　彼女はスーパーコンピューター

赴任したての校長の仕事は際限がなく，その日も複数の出張業務を終え漸く帰校。「今日こそ学校便りを書くぞ！」と，そこへ事務主査のＴさんが申し訳なさそうな表情でやってきた。「校長先生，文書の決裁が溜まっているのですが。」分かっている。やろうと思うと来客，電話，会議・・・，言い訳をぶつぶつ。消耗品費をどれだけ節約できるか，絶対に必要な備品は何か，それらを含めた今年度予算案，大規模改修に向けたタイムスケジュール等々，年度初めは決裁事項が目白押し。「明日の○時から○時までは校長先生と教頭先生がいらっしゃいますから，これとこれの相談をさせてください。」「教材関係は遅くなると先生方が困るので，できれば今日やってしまいたいのですが。」半ば呆然としている私にテキパキと提案をしてくれるＴさん。消耗品の管理，備品購入の進捗状況，学年会計の助言指導等々，日常の業務も滞ったという記憶がない。彼女の頭の中はどのように仕分けされているのだろう。事務主幹として活躍中のＴさんは今年度末で定年を迎える。４月からは，どこがＴさんを獲得できるのか。あちこちで手ぐすね引いている様子が目に浮かぶ。

２　彼女の辞書には

校長としてスタートした学校で，Ｓさんという養護教諭と出会った。とにかく明るい人だった。子どもたちは，その笑顔だけで腹痛が治ったり擦り傷の痛さを忘れたりした。１学年１学級，児童数150名，自校給食だったので職員数は調理員さんを含めて15名のアットホームな学校だった。小規模校といえども業務数は大規模校と同じ。先生方は山のような分掌を担当していた。様々な部分の「行間」を埋めなければ忽ち教育活動が行き詰まってしまう。児童玄関の掲示物がいつの間にか秋から冬に衣替えしていたり，職員室の水回りの布巾がきれいに洗濯されていたり，教室へ行くことを渋っている児童が保健室でドリルをしていたり。それら全ては彼女の仕業であった。陸上大会が迫れば練習の補助を，若い教師があたふたしていれば印刷物を請け負い，気持ち的に弱いところのある職員には頻繁に声がけをし，暴力的な児童には様子を見守りながらじっくりと話を聞いていた。ナポレオンは「余の辞書には・・・」と言ったとか。彼女の辞書にこそ「私の仕事ではありません。」という言葉は見当たらなかった。

３　彼らは全校児童の担任

事務職員，用務員，司書，養護教諭，栄養教諭，支援員，地域教育コーディネーター，彼らは児童の学級担任ではない。でも，私は，内心「全校児童の担任」と名付けていた。児童一人一人のこと，保護者や地域の様子を，ともかく何でも把握していた。「－の情報」より「＋の情報」を発信してくれるのも凄いと思った。彼らのような職員が活躍している現場は，風通しがよく，子どもたちを＋方向で語り合い，間違っても教員同士のいじめなんて起きるはずがない。

おわりに

10月半ばの台風19号は多くの犠牲をもたらした。学校も例外ではない。休校をよぎなくされていた子どもたち。学校再開の報に小学校中学年くらいの女子児童が「早く学校へ行きたかった。先生や友達に会えるので嬉しい。」と満面の笑みであった。この一瞬のために，先生方の身を粉にした日々があり，それを支えてくれる多くの職員が存在する。

第11回教師力アップ講座

期日　令和元年７月28日（日）
会場　新潟教育会館

～受講者の声～

第１講座

「小学校外国語科の授業づくり
～外国語科の授業で大切にすること～」

講師　新潟市小学校英語教育推進リーダー
新潟市立味方小学校 教頭
村 上 大 樹　様

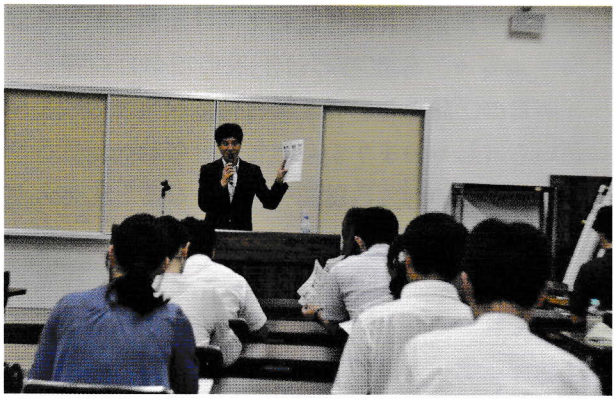
- 外国語に対する見方・考え方が分からなかったが，今日のお話を聞いてよく分かった。コミュニケーションを行う目的を，常に子どもたちにもたせるのはとても難しいが，努力して勉強していきたい。
- 外国語に対する苦手意識があったが，大変分かりやすい講義であった。目的・場面・状況の大切さが分かった。
- 「単元デザイン」というお話が心に残った。子どもたちがコミュニケーションをとりたいという魅力的な相手や場をゴールに活動していくことが大切だと分かった。

第２講座

「道徳科の授業に求められること
～模擬授業を通して
道徳科の授業づくりを考える～」

講師　新潟市教育委員会
学校支援課嘱託指導主事
吉 原 修 英　様

- これまでの「モラルジレンマ」や「AかBか」という授業から，「両立指向」という一歩進んだ観点を再確認し，心から納得した。
- 常々教え込みのような授業になってしまい，悩んでいた。根拠を大事にし，それを取り上げみんなで考えるということを学んだ。
- やりっぱなしの授業ではだめだと思った。レベル３を１時間の授業の中で成し遂げなければ意味が無いと痛感した。両立指向できる子どもたちを育てていきたい。



教育アドバイザーリストについて

今年度，新たに教育アドバイザーとして登録いただいた皆さんにお集まりいただき，11月16日「教育アドバイザー説明会」を実施しました。

皆さんのこれまで培われたお力を情報交換し，今後のアドバイザー活動の充実が予想されるひとときとなりました。

計112名のアドバイザーの皆さんがあらゆる教育活動のお手伝いをさせていただきます。

「教育アドバイザーリスト」を県内の市町村教育委員会と幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校・中等教育学校に送付しました。

活用についての質問等は，お気軽に新潟教育会館にお問い合わせください。